

—何故、何故の真意—

今回もまた、禅問答の中から一つ紹介させていただきます。

10 昔、釈迦が色々な仏が集まっているところに来た。文殊菩薩^{もんじゅぼさつ}がその場に最後に到着すると、集まっていた色々な仏は皆自分たちの住処に帰ってしまった。そこにただ一人女人だけが残っていて、釈迦のすぐそばで深い座禅の境地に入っていた。文殊菩薩は釈迦に言った。「どうして女人がお釈迦様に近づくことができ、私は近づくことができないのでしょうか。」「自分自身でこの女人の禅定をさまして、聞いてみるがよい」と釈迦は文殊に告げた。文殊は女人の周りを三回まわり、指を鳴らすこと一回、女人を梵天^{ぼんてん}にまで持ち上げて、神力の限りを尽くしたが、女人の禅定を解くことはできなかった。釈迦は言った。「たとえ百千の文殊が集まってもこの女人を禅定から出すことはできないであろう。しかし、ずうっと下の方の位にいる罔明^{もうみょう}という菩薩なら女人の定をさますことができるであろう。」そのとたん、罔明が地面から現れて、釈迦を礼拝した。釈迦は女人の定をさますように彼に命じた。罔明が女人の前でたった一回指を鳴らすと、女人は禅定から覚めた。

20 今回はいつもと違って仏様の世界のお話です。近年の仏像ブームもあってか、仏様にも色々な位や役割、個性があるということを知っておられる方もいらっしゃると思いますが、今回のお話の理解の手助けとして簡単に、仏様の世界について前置きしたいと思います。仏様にも位、階級というものがある、一番上の位から、如来、菩薩、明王^{みょうおう}、天^{てん}というグループ分けになります。如来という名の付く仏様は、仏の最高の地位に位置していて、悟りの境地に達している仏様です。この話で登場する釈迦もそのうちのひとつで、釈迦如来といわれます。次に、菩薩ですが、如来の位に上がるため、精進修行真只中の仏様です。修行の一つに衆生救済という使命があり、生きとし生けるものを救済するという役目があります。一般的には、優しい慈悲の心で接してくれる観音様やお地蔵様が有名です。文殊様は正しい智慧を人々に貸し与えてくれる、菩薩の中でもエリートです。次に明王と言われる仏様です。今回のお話には登場しませんが、恐ろしい怒りの表情で、顔や手がたくさんあるものもあります。菩薩様のように慈悲の眼で接していても埒^{らち}のあかない人々に対して、忿怒^{ぶんぬ}という形相で持って明王が改心させます。最後に天ですが、仏法の守護神としての役割がある仏様です。四天王といわれる持国天、増長天、広目天、多聞天や、七福神でおなじみの弁財天、大黒天、毘沙門天などがあります。ここに出てくる、梵天というのは、お釈迦様が悟りを開いたとき、その悟りを広めようかどうかとためらっているときに、梵天が舞い降りてきて体験した悟りを広めなさいと諭したという逸話があります。

30 本題に戻りますが、このお話には幾つかのポイントがあります。諸仏が皆、お釈迦様の下に集まっているのに何故エリート菩薩の文殊だけがなかなかその場に集まることを許されなかったのか。何故その場に到着したとたんに諸仏は皆帰ってしまったのか。何故仏の地位にもいない女人がお釈迦様のすぐ傍で禅の境地に入っているのか。また何故、菩薩の地位のトップにいる文殊は女人ごときの禅定を解くことができないのか、逆に菩薩の下位にいる罔明がいつも簡単に禅定を解いてしまったのは何故か。といった常識的な見地をことごとく覆すような事象に対する何故です。いつも書いていますが、禅の修行は今まで自分が持っていた物の見方を一旦取り外すことから始まります。ゆえにおおよそ常識とは正反対の事象を提示され、それを自分なりにどのように取り組むかというところから始まります。この仏様は、あの仏様より上だとか下だとかというのは、色相の世界であり、全てが一に帰す空相の世界に裏打ちされているということに、身をもって気づかなくてははいけません。

40 CLでも、何故、何故という質問に対して答えられないものはたくさんあることを教えています。何故人は生きなければいけないのか、何故天災に逢わなければいけないのか、何故突然不快な感情が湧きあがって来る時があるのか、何故急に友達の態度が冷たくなったのか、などなど。自分の意志ではコントロールできないものと重なりあってもいます。答えの出ない何故、何故やコントロールできないものに囚われている必要はなく、今なすべきことの行動の一步を踏み出すことをCLは教えてくれています。

蒸し暑い日々が続きますが、お釈迦様の前で、スーッと座していられるような平常心を保ちたいものです。今回も誌面にて皆さんとお会いできるご縁に感謝して

50

合掌